

創造性を育成する指導の一試案

視覚表現への追求「コラージュ制作」

塚本千晶

Teaching Imagination Skill by Making Collage

Chiaki TSUKAMOTO

This paper is an introduction of my teaching fruit about visual expression in Color theory class. In this class, using last three time, we made a collage. Through making a collage, students acquired basic skills of color combination and of screen arrangements and met themselves insight imagination. In this paper first explanation of purpose in this class is there, second what is collage and why they make collage are given account of, third some concrete works are shown with picture and fourth my comments for their works are mentioned.

Keywords: color, collage, imagination

1. はじめに

初学年を対象とした色彩文化論の授業目標は、色彩の知識を習得し制作に応用できることである。そのために色彩感覚を豊かにし、感性を養う能力と視覚効果を表現に応用できる技術的な能力の向上を授業に組み込んでいる。全 15 回の授業のうち 1 回から 12 回は配色カードを使いながら理論と演習を行ない 13 回から 15 回は応用制作を行っている。本稿では、色彩文化論の授業において 2017 年、2018 年の 2 年間に行なった最終課題「コラージュ技法を用いた制作」のプロセスから成果作品について報告するものである。

2. 創造性の育成

2.1 コラージュとは

コラージュは糊で貼り付けるという意味のフランス語から派生している。実際にはコラージュという言葉を抱える芸術の分野の広さは多義にわたっているという [注1]。シュルレアリスムの多くの作品とりわけ代表的なマックス・エルンストが知られているが、ピカソの異素材を貼り合わせる表現に端を発する。本論文の出筆中（2019 年 2 月現在）、東京都庭園美術館で回顧展が開かれている岡上淑子もモチーフにファッション誌を活用したコラージュ作品を 1950 年代に多く制作した [注2]。

河本真里は著書『切断の時代』の中で「コラージュは、新聞紙、木目を模した壁紙、防水布、さらには芸術家の作品自体といった既存のオブジェ（物）を台紙に貼り付けるという以上に、他の領域（あるいは他の時間）に属していた、一つあるいは複数の要素を新しい芸術のコンテクストに移すことを意味する。コラージュにおいて重要なのは、このような諸要素が移動し、新たに出会うことによって、形態、構造のレベルもしくは意味のレベル（あるいは同時に二つのレベル）において元のコンテクストからの逸脱が生じることである。それゆえコラージュの原理に基づいて制作された作品は、異質な構成要素を受け入れ、均質な空間を破壊する不連続性を特徴とする」

と述べている [注3]。

2.2 課題とする題材の背景

このように述べればコラージュとはなんととも奇想天外な創造性の高い表現なのであろうかと壁を感じるかもしれない。しかしコラージュ技法には特別な技術を必要とせず、雑誌などの既存のイメージから刺激を受けた素材を切り取り組み合わせることにより自己表現ができる特徴があるのも事実である。

本論文内で紹介する「色彩文化論」という科目は、初学年を主な対象とした科目である。メディア情報学科では多様な角度から多彩なカリキュラムが組まれ、学生が興味のある分野を好きな順番で履修できるため、本科目は必ずしもデザイン教育の手ほどきを十分に受けた学生のみが受講しているとは限らない。むしろ色彩学の入門を初学者に伝えることを主な目標にしている。しかし座学のみではなく制作を通じてデザインという営みを学生に体感して欲しいという願いが論者にはあった。そこで色彩をプロダクトに応用するデザインツールの1つとして実践する意味で取り組みやすいコラージュ制作を行った。確かにコラージュはプロダクトではないものの、色彩を扱う中で諸々のプロダクトの根底にあるイマジネーション能力や感性を養うことができると考える。河本の述べる「複数の要素を新しい芸術のコンテクストに移すこと」を通じて、学生各々が自身の好きな素材を全く別の文脈に置き換え、自身の既存の心的空間を破壊する—そのような活動の中にプロダクトを含め「新しいモノ」は誕生してくるのではないだろうか。

3. 色彩文化論の授業における課題「コラージュ技法を用いた制作」の実践

3.1 実施概要と内容

目的 雑誌などの印刷物を中心に本来意味のあるメディアとして発信されたものを切り抜き切り取られた素材から新たに自分なりの感性で再構築する。
自分が何を感じ、何を考え、どのように表現したいのか実際の体験を通して考える。

期間 第13回～15回

第1回 コラージュ技法の鑑賞と課題の説明

各自用意した雑誌から興味のある素材を切り取る。

第2回 各自用意した雑誌から興味のある素材を切り取る。

切り取った素材をカテゴリごとに分ける。

題名とメインカラーを決める。

A4 ケント紙に並べて構成する（貼り付けない）。

第3回 題名とメインカラーを決める。

A4 ケント紙に構成し貼り付ける。

別プリントに作品の題名とメインカラー、制作イメージのコメントを書き裏に貼り付けて提出。

3.2 授業課題における成果

5つの学生の作品（図1、図2、図3、図4、図5）を題名と学生が書いた制作イメージのコメント（ママ）と共に紹介する。なお、制作の取り組み易さを考慮し、学生には予め作品のメインカラーを決めてもらった。これも併記する。

図1 「靴と足」メインカラー 赤

靴であふれている世界、惑星を意識して素材を配置しました。

なんとなく円を描くように、放射線を少しイメージして作ったデザインです。

素材の中にヘビをまぜたのには靴と足ばかりで出来た世界に足のないヘビがいたら面白いかなと

思ったからです。



図1 学生作品



図2 学生作品



図3 学生作品

図2 「ふたりめ」メインカラー 赤

自分以外の自分になれない。そんな時にふたりめの自分がいればふたり分の服、髪型、化粧など一人の自分であるよりも可能性が広がると考えた。ふたりめの自分を出すことができれば二倍楽しむことができる。

背景の上に青い服を貼って海の色と同じなので心の深さとかぶせました。

一番目立つ真ん中に人を二つに切り二人の自分になるようにした。

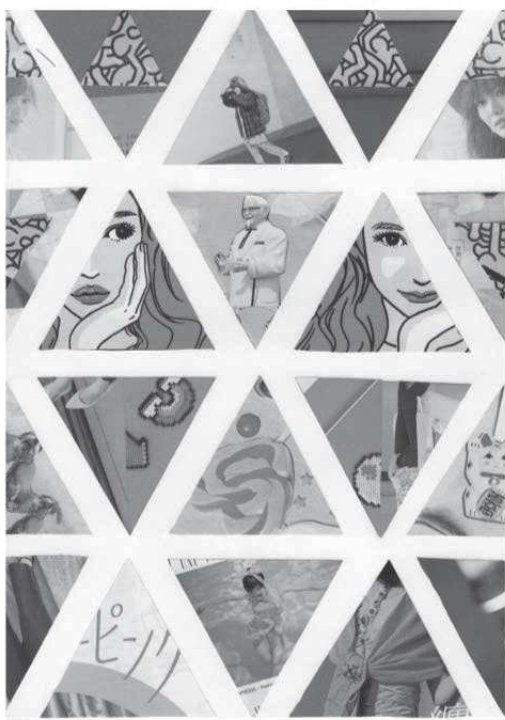


図4 学生作品



図5 学生作品

図3 「宇宙旅行」メインカラー 黄色

宇宙モチーフのものを集めました。トランクを中心に旅行というテーマを連想しやすいようにした。右下に緑、左に黄色をまとめた。

配置に悩んだ。見た人が面白いと思える工夫をした。

図4 「万華鏡」メインカラー ピンク・ピンク、ブルー

規則正しく並べることで万華鏡を覗いている画面にしました。

ピンク、水色の順に並べ、一列黄色を入れることで画面を引き締めました。

白の空間を均一に工夫しました。

図5 「コスメ素材の融合」メインカラー 赤・青

コスメが好きなので雑誌に載っているコスメを集め（特にリップ）作品のイメージは全体の赤に水色を使ってハートを目立つようにしました。配色も難しく自分のイメージがなかなか表現できず、苦戦したが同系色を集めて見ました。楽しかった。

3.3 作品へのコメント

図1 「靴と足」

緩やかな放射状に並べられた靴と足から、画面の枠外まで歩みを進める空間の広がりが見て取れる。また画面内に配置された異質な存在一蛇・手袋・唇が物語の不均衡さを際立たせ面白い。色彩に関しても、初めメインカラーを白にしていたがインパクトが足りず、論者の助言を活かして、赤をメインに持ってきたことでアンニュイなモノトーンが逆に際立つ形となった。また赤色

の画面を少し傾けるアンバランスさがモチーフ間の歪み援け鑑賞者の想像力を掻き立てる役割りを担っている。着飾るという自由な行為によって初めて歩むことができる人間の不安定さ、しかしそこにある葛藤と楽しみが逆説的に表現されている。

図2 「ふたり」

画面を真ん中で分割した大胆さが作者の意志をはっきりと表している。何層にも貼られた素材を背景に、青い色を重ね合わせることで心の深さを物語る。ファッションという自己表現に様々な自分の姿、可能性を感じさせるエネルギッシュな作品である。画面左下の白いキャラクターと車、左上のビデオテープも遠くの世界への憧れを彷彿させる。分かりやすくもグラフィック的によく構成された力作である。

図3 「宇宙旅行」

作者のコメントにもあるように、配置に悩み何度も構成を繰り返していた。多くの素材を綿密に組み合わせた中に広がりとお行きが感じられる画面である。宇宙のモチーフよりも旅行のモチーフや旅先で出会うだろうもののモチーフを大きく見せることで、世界を股に堂々と存在する作者の夢が痛快である。画面の左の下黄色時計、目、窓枠と視線を誘導する効果もあり、まさに大路の春を謳いけりといった躍動感や希望に満ちた作品である。

図4 「万華鏡」

万華鏡は本来、一つの素材を様々な角度から同時に見ることによって幻想的な気分を味わう玩具である。ここに映されるのはカラーイメージの不連続性である。作者の狙い通り柔らかいブルーとピンク全体の中に一列入れた黄色は見事に画面を引き締め、正三角形を反射させながら無限に広がりを見せる。また万華鏡内からのぞき込まれるという物語も面白い。鏡の本質を捉えた自己観察が内的世界の一部として逆説的に用いられている。左右に非対称なイラストの女性の顔が配当されていることから時間の経過を対比させたようにも感じられ、鑑賞者の立場を揺るがす工夫に凝っている。均等に配置されたモチーフが鑑賞被鑑賞の不気味な不均衡を際立たせている。

図5 「コスメ素材の融合」

リップスティックなど化粧品を素材に扱う作品は授業の中で多く見られたが、この作品は色と面積の配色関係を応用しよく考えられている。画面の中心に配置したハートを見せ場とし、背景に種々の赤を用いてメリハリを効かせている。双方幾重にも重ねられた生地が存在は化粧によって塗り隠された乙女の心情を考えさせる。シンプルな構成とシンプルな物語が潔い主張を感じさせる若々しい作品である。

4. まとめにかえて

2017年、2018年の作品は以上のような優秀なものに恵まれた。学生たちはコラージュ制作の中で、自身の好きなものをその「モノ」の文脈から一度裁断し、画面に再構成するという経験を得た。「モノ」は本来殆どの場合、機能が必然的に備わっているが、制作の過程で彼女らは機能以前造形自体という「モノ」との再会を果たす。コラージュ素材の大きさや画面のバランス、そして色彩の配置などを総合的に考えながら、非日常的な文脈の中で自身の好きなものを表現する行為には、きっと当人らの思いもよらない自身の再発見、内省が同居していたことであろう。

先にコラージュ自体はプロダクトではないと述べたが、デザインの役割が所与の問題解決の一手段であるとするならば〔注4〕、コラージュの文脈再構成という視角はもしかするとデザインの近しいアプローチに近いのかもしれない。今後も学生の創造力を掻き立て、柔軟な問題解決能力を養う意味で、こうした制作活動を授業内に組み込んでいく所存である。

参考文献

- ¹ 藤村里美：コラージュとフォトモンタージュ-写真黎明期のフォトモンタージュから日本の写真におけるコラージュの受容まで-、東京都写真美術館紀要 6、27-38、2007
- ² 神保京子：岡上淑子とコラージュの世界-日本のシュールレアリズムにおける位置と活動-、東京都写真美術館紀要 6、49-64、2007
- ³ 河本真里：切断の時代-20 世紀におけるコラージュの美学と歴史-、ブリュッケ、5、2007
- ⁴ 塚本千晶：「デザイン概論」における「問題解決型」授業の導入-ピクトグラム制作-相模女子大学メディア情報研究、4、25-32、2018